

立春もすぎて、ギャラリー稲童の庭の梅がほころび始めました。とりわけ、「日中友好」の梅が元気に花を咲かせているのは嬉しいことです。この梅は孫文が宮崎滔天の家を訪れた際の記念写真に写っている宮崎家の庭の老梅から取り木したものです。一昨年、荒尾市の方にいただいた大切な梅の木だけに、きれいな花をつけてくれて一安心です。

常設8期目の展示は「脩は西へ」と題して、関西以西の脩の足跡を追ってみました。また、「里帰り展」と称して脩の作品を所蔵して下さっている方に、今期間だけ貸し出しをお願いして、収蔵品以外の作品も展示しています。中には、奥州平泉の毛越寺の浄土庭園を描いた30号の作品もあります。お楽しみに。

ちょっと御報告が遅れましたが、昨年11月初旬に開催した「ギャラリーの仲間達展」はおかげさまで好評裡に終了しました。

まず、浅田さんの絵画の大作は見事な出来栄えでした。落ち着いた色使いとしっかりした画面構成、思い切った画面の形状などこれまでの画業の到達点ともいえる作品に仕上げっていました。ギャラリー所蔵のために1点譲って頂きました。メモリアルルームに当分の間展示する予定です。これもお楽しみに。

梶さんの陶器は本人もびっくりするほど、とにかく良く売れました。もちろん、作品のレベルの高さがモノをいったのは言うまでもありません。

金丸さんの竹細工もすべて売り切れました。金丸さんは現在、俳句に没頭していますので、竹細工は当分の間作ってもらえそうもありません。作品ご希望の方はしばらく御猶予のほどを。

三井万千子さんのビーズ細工もお見事でした。色といい、形といい作品としてしっかり構成されていました。京都からわざわざ駆けつけていただいたビーズのお師匠さんもこの作品群に高い評価をつけてくれました。

胡田さんは、京染の工房「胡田染芸」の作品群を展示してくれました。原田脩の瀧の絵に因んだ瀧の図柄の振袖、四季の花をあしらった暖簾、椿と薔薇の図柄で金糸の縫いとりをした豪華な打ち掛けなど、京都ならではの染物がそろいました。

また、11月24日に開催した染織家吉岡 幸雄さんのギャラリー・レクチャーと映画上映会には80人もの方に来ていただきました。本物の十二単をご持参いただき、平安時代の襲（かさね）を初めて見る事が出来ました。また、「刈安」というススキに似た植物を煮出して実際に染める実演もして頂きました。吉岡さんは法隆寺の国宝「四騎獅子狩り文錦図」の復元などで、菊池寛賞を受賞した色彩に関しては日本の最高峰の方です。

その吉岡さんが原田脩の作品をしげしげと眺めて、色彩の美しさを褒めてくれました。館主としては年甲斐もなく我を忘れて大感激しました。

さて、今春も瀧月忌の記念行事として3月22日にギャラリー・レクチャーを開催します。今回の講師は中世の水墨画、とりわけ雪舟の専門家である学習院大学教授の島尾新先生にお願いしました。雪舟は遣明使節の一員として明に赴き水墨の技に磨きをかけて帰朝したおりに、応仁の乱を避けて九州にとどまり豊前・豊後の各地を深訪しています。九州における雪舟について「雪舟の足跡—九州編」と題して、九州・山口に残る雪舟庭園と大分の雪舟のアトリエだった「天開図画楼」について語って頂きます。「天開図画」とは天の描きだす絵画、つまり美しい自然のことです。雪舟は「天開図画楼」と名付けたアトリエで中国の古典絵画の研究に打ち込み＜山水小巻＞や＜四季山水図＞といった名品を描きあげたのです。先生のお話しに是非御期待下さい。

なお、島尾先生の著作「雪舟の山水長巻—風景絵巻の中で遊ぼう」(小学館発行)は国宝の山水長巻を面白く解説した読みやすい本です。興味のある方は、この本をギャラリーで閲覧できるようにしておきますので、ご覧ください。

ギャラリー稲童館主 植田義浩